

## 2.3 リュウトークイン 中央

# 作家・村上龍さんが語る 「働く」意味とは？

「今の時代、いい大学に行ってもいい会社に行っても安心ではない。自分の向いていることに会った人のほうが有利なわけですよ」ベストセラー『13歳のハローワーク』の著者である作家、村上龍さんの弁だ。2月3日、後楽園キャンパス5号館で、「村上龍と語る大学生の集い 13歳のハローワークをめぐる——リュウトークイン 中央」と題するフォーラムが行われた。会場となった5号館5階の大教室は就職活動中の3年生を中心に、「働く」ことを考えるうえでのヒントを得ようとする学生で満員の熱気だった。

学生記者 滝沢孝祐（総合政策学部2年）

として参加、半年間にも及ぶ準備を進め、この日はともに司会役をつとめた。

### サラリーマンって職業なの？

（司会者から）

——なぜ、この時代に『13歳のハローワーク』を書いたのか

村上 雇用状況が変化しているにもかかわらず、子どもや若い人へのアナウンスメントが昔と全く変わっていない。「いい学校に入って、いい会社に入る」というのは成長期の時代にマッチしたアナウンスメントであって、現代にあうものではない。それなら、現代にマッチするもの、と思いついたんだよね。

——サラリーマンやOLが、「職業」から除外されていますよね

村上 サラリーマンって職業ですか。職業というのはエンジニアや教師などではないのですか？ だから、最初から入れなかったんですよ。他方で「起業家」を職業に入れたのは、

自分で会社をつくるというのは、自分は何をやりたいのか？ ということを初めから自問自答することになるからです。何をやりたいかということが大切なんです。

——村上さんは働くことや、就職について悩んだことがありますか

村上 僕は小さい頃から協調性が無かった。そのためか、親から「前はサラリーマンにはなれない」と言われてね。その時に、生きていく上で地平線が狭いというか、選択肢が無いことに気付いたのです。逆説的ではありますが、そこで職業について考え出した。美術大学に入ったのも、サラリーマンにならなくて大丈夫という考えから。それからヒッピーをやって、「群像」で作品を募集しているのを知って出してみたら、群像新人賞と芥川賞を受賞した（受賞作『限りなく透明に近いブルー』1976年）。良くも悪くも、僕には作家という選択肢しかなかった。

この企画は、朝日新聞社大学プロジェクトの一環として開催された（中央大学後援）。「大学生がメディアを用いて何ができるのか」という問いに対して、新聞社と大学生が連携して行う初の企画となった。朝日

新聞社の寄附講座などで関係する大から集まった学生で実行委員会を構成し、本学からは総合政策学部細野ゼミナールの学生である、大野真紀子（政策科学科新4年）と滝沢孝祐（同新2年）のふたりが実行委員

## 学生による自主的な企画準備 自分で考える大切さ、軸に

大学生による実行委員会が、なぜ村上龍さんを招いて「働く」ことをテーマにしてフォーラムを開催しようと考えたのか。その願いは村上さんにぶつけた司会者からの代表質問の中にも隠されている。

2時間に及ぶフォーラムの中で、村上さんは決して「結論」をいうことはなかった。著書の中にこんなくだりがある。「結論を言ってしまうと、参加者が自分で考えなくなることに気付いたから」と。そして、これがそが実行委員会が目指したものである。

当日はリクルートスーツに身を包んだ、就職活動中の3年生も大勢会場に見受けられた。また、就職活動をする中で悩み、藁にもすがる想いで本フォーラムに参加したという声も聞こえてきた。しかし、実行委員会が伝えたかったメッセージは「自

分で主体的に考える大切さ」であった。実行委員は自らに対する自戒の念も込めてメッセージを発信することにした。

遡ること約半年前、朝日新聞から実行委員に伝えられた言葉は「好きなことをやっていい」。実行委員として、今まで受動的な生活を送ってきた大学生であり、これも一つの試練。そして導かれた結論は、実行委員の身近な問題であった「就職」をきっかけに、「働く」ことを同年代の学生に訴えていくこと。

当初の企画書によると「働くことについて、どんな考えをみんなが持っているのかを知り、それについて議論することで、自分たちにとって働くとはどういうことか、何のために自分自身が働くのかを考える」と記されている。フリーターに加え、ニートという存在の出現、さらに派遣・契約社員など新しい雇用形態の出現：何を目標せよいいのか、何をすればよいか。そのことについて

多くの実行委員が悩んでいたことが、企画の大きな後押しとなった。

このような考えを胸に秘め、実行委員会はシナリオを作成し準備を進めていった。シナリオは書き直すこと10数回に及んだ。

### 28歳までに仕事決め、35歳までに キャリア積み

——ニートやフリーターの増加が社会的な問題として挙げられるが

村上 まず、フリーターとニートは分けて考えなければならない。戦略的に将来を考えながらフリーターをやっている人は別として、考えを待たずにいるフリーターはリスクが高い。フリーターをしている間にも、どんどん年はとる。戦略的でないフリーターは若者の特権である「若さ」と「時間」という「資源」を時給800円で売っているんです。若いときには、何事をもなし得る時間がある。30歳になった時に、自分の資源をそうやって切り売りしてきた人と、

仕事を覚え始めてきた人とは、天と地ほどの差がある。そして彼らが40歳になれば、フリーターではなく、ホームレスなど社会的な弱者になってしまう。そういう人が増加すると社会は不安定化する。そういう人の怒りで社会不安が起きたり、不健康なカルト宗教が流行ったりと、これはよくないですよ。

——選択肢が多様にある中で、選択ができない。迷ってしまう(女子)

村上 自分が何に向いているのか、ということとはわかりにくい。けれども逆に考えてみれば、わかりやすくなるのではないか。意外と嫌いなものはわかります。嫌いなものを考えれば、好きなことはおのずとわかってくるはずですよ。何かを選ぶ、というのは、反対に何かを捨てることだから。——村上さんにとって、人生で大切なものとはなにか(男子)  
村上 今の自分にとっては「家族」ですね。こういうことを言うと、「家庭と仕事はどちらが大切なのか」と




いうことを言われますが、それは一番嫌いな考え方ですね。家族の支えがないと仕事もうまくいかない。どちらが欠けてもだめなんです。

——何を基準に就職すればよいのか(女子)

村上 「好きなことを仕事に」というキャッチコピーはいいけれど、大学生の就職活動については、そうシンプルに考えられない。自分の能力や持っているものは、その人では

いとわからない。まして、20歳前後ではわからないだろう。転職のプロがいうには、「自分はだいたいこの道で生きていく」というのを、28歳までに決める。そして、それを決めたら35歳までその仕事でキャリアを積む。それくらいの目安で考えるべきだと思います。これで、来年希望のところへ就職できなくても少しは楽になったでしょう(笑)。就職がゴールではないのですから。

最後の最後に一言「救いの言葉」をさし伸べて、トークは終わった。「答えを求める」参加者にとって、フォーラムは一面「もやもやとした不満」が残る内容となったかもしれない。しかし、その「もやもやした不満」こそが村上さん流の仕掛け、「本気で自分で、きょうから考えろ」という挑発だったかもしれない。



## 1~2年生 学生記者募集

ジャンルの  
あらゆる取材現場へ  
マスコミに通用する取材力、  
文章力を鍛えます

募集人員	若干名
課題作文	「私のとおきの話」(800字)
締め切り	4月末日

問い合わせ

中央大学広報課  
「Hakumonちゅうおう」編集室

● 0426-74-2146  
● rtaro@tamajs.chuo-u.ac.jp (編集専任:田中)